

日本人被爆者と日系アメリカ人被爆者の活動から平和運動を考える

グロリア・モンテブルーノ・セラー

米国広島・長崎原爆被爆者協会名誉理事
歴史家

1. 序文

2013年1月、初めて広島を訪れた。広島平和記念資料館に行き、被爆者の体験を聞いた。強烈な経験だった。私は涙を流しながら資料館を去った。とても寒い冬だった。私はまだ、顔を撫でた冷たい雪の風を覚えている。その被爆者の体験話を思いながら平和公園を歩いた。そして、ベンチに座り、原爆ドームを見ながら、1945年8月6日広島に起こったことを考えた。『ヒロシマ・ノート』のプロローグで大江健三郎はこう書いた。「もし、広島に対してあえて眼をつむり耳をとざし舌を縛ろうとする者にとってでなければ、かれの内部において広島的なものがすっかり完結することは決してないであろう」。私もそう思う。広島を訪れる前には、私は原子力の平和利用を強く支持していた。広島を訪れた後に、私の心は変わった。

翌年2014年の夏、広島市立大学の「広島と平和」セミナーを受けた。ここで得た科学研究の知識によって、最も壊滅的な原子力発電所事故の一つであるチェルノブイリ原発事故と私の個人的なつながりについて考えるようになった。チェルノブイリ原発事故の日、1986年4月26日、私は高校生だった。イタリアのトリノに住んでいた。家の寝室の窓からは、遮るもののない白い姿のモンブランの山が見えるようなきれいな所だ。しかし、事故の後、高校の庭で遊んだり、友達と自転車に乗ったりすることは許可されなかったことを今でも覚えている。ほとん



会場の様子

どの時間は屋内にいなければならなかった。長い間、新鮮な野菜を食べることができず、新鮮な牛乳を飲むこともできなかった。新しい言葉を覚えた。その言葉は放射能だった。

この時、広島で、私はチェルノブイリ原発事故と私の甲状腺疾患の間には関係があるのではないかと初めて思い始めた。あの悪名高い放射性雲とあとで亡くなった多くの友人の死の間に関係があるのかとも思い始めた。

2015年9月21日に国際平和デーを祝うために、私は教えていた大学のキャンパスで平和シンポジウムを開催した。その日は、広島と長崎の原爆の体験展のオープニングで幕を開いた。南カリフォルニアには被爆者が住んでいることを知り、その広島の被爆者の一人である更科洵爾氏をイベントに招待することができた。更科さんが話した被爆体験はそこにいた大学生の感情を動かし、彼らは泣いた。

更科さんとの出会いは、ASA（米国広島原爆被爆者協会）の活動への私の参加の始まりであり、在

米被爆者への医療援助を求めるとした南カリフォルニアにおける社会運動の歴史に関する、私の研究の始まりでもあった。

私はこれから、CABSUS（米国原爆被爆者協会）と、次には、そこから分かれたASAについて、そして、ASAの元会長の据石和氏について、最後は、今のASAの会長の更科洵爾氏について、話をしたいと思う。

2. CABSUS「米国原爆被爆者協会」と ASA「米国広島－長崎原爆被爆者協会」

歴史的記録によると、1945年8月6日には、広島市には約3,000人の日系人が住んでいた。アメリカで生まれた日系の子供たちは日本語と日本文化を学ぶために日本に送られていたのだ。ほとんどの場合、彼らは祖父母と暮らしていた。アメリカにいる両親は子供たちが20歳になる前にアメリカに帰ることを望んでいた。二重国籍を持つ個人は、20歳になるまでに、どちらかの国籍を選ばなければならないという法律があったのだ。

アメリカに帰る日系人はアメリカでは「帰米」として知られていた。

1948年に出版された南カリフォルニアの日系人コミュニティの歴史の本によると、南カリフォルニアに戻った日系人の数は約3,000人だった。しかし、その帰米日系人の中に何人が被爆者であったのかを推定することは不可能だ。1947年5月16日に、最初の日系被爆者がサンフランシスコに着いた。名前は西川徹氏だった。ロサンゼルス『羅府新報』は西川さんの個人的な体験を記事にした。広島への原爆投下の目撃証言として、アメリカで日本のコミュニティに紹介されたのは、この時が初めてだった。

日系被爆者は肉体的、精神的な傷を負っていた。彼らはいつも孤立していると感じた。ほとんどが内向的になった。日系被爆者とアメリカにいる被爆者はいつもアメリカの医者について不満だった。彼らは、アメリカの医者は原爆が人体にどのような影響

を与えたかを理解していないと思っていた。多くの被爆者は、アメリカの医者が原爆病の存在を認識していないと信じていた。

1965年8月6日に岡井巴氏という方が『羅府新報』に「原爆友の会」結成のお知らせを出した。岡井さんは広島市の被爆者だった。戦争の時、大阪に住み、1945年7月ごろ、妊娠して夫と一緒に広島に帰ってきた。夫は1946年6月に亡くなった。1960年代初頭に、帰米日系人と結婚し、娘と一緒にアメリカに引っ越した。岡井さんは日本の外に住んでいる被爆者の窮状について非常に声高に訴えた。

1971年10月13日にCABSUSは正式に設立された。下田要氏と新井覚氏とともに、岡井さんはCABSUSの創設者のひとりと考えられている。CABSUSの会員の中で、据石さんは主要活動メンバーで、事務作業をしているボランティアだった。

1967年10月3日に岡井さんは広島市を訪ねて山田節男市長（当時）に広島市の医者を派遣するよう要請した。CABSUSの社会活動は、二つの目標の達成に限定されていた。それは被爆者に健康診断を提供してもらうために広島からアメリカへ医師を派遣してもらうことと、日系被爆者に代わってアメリカで医療救済法案を推進することだった。

最初の正式な健康診断は1977年に行われ、ロサンゼルス郡医師会によって支援された。アメリカでは被爆者への医療救済法案が成立したことはない。1970年代の終わりには、約1,000人の被爆者がアメリカに住んでいた。カリフォルニアには約500人の被爆者が住んでいた。ハワイには約300人の被爆者が住んでいた。そして残り的人たちはアメリカの東海岸とカナダに住んでいた。

CABSUSは1977年から1992年までに健康診断を実施した。CABSUSの中で意見の違いが起こり、1993年に二つのグループに別れた。1993年に、ASAが結成された。

ASAは非営利団体だ。ASAは南カリフォルニアとハワイの被爆者を支援している。2012年には、南カリフォルニア、アリゾナ、ユタ、ネバダに263人、ハワイに100人のメンバーがいた。協会の目的は米国の被爆者に公共サービスを提供し、原爆の

影響についてアメリカ人に話し続けることだ。協会の活動には、被爆者の医療および福祉サービスを取得する手続き、放射線被爆の影響と治療に関する医学研究の促進が含まれる。協会は被爆者がさまざまな書類の取得や、健康診断をうけることも支援する。長年にわたり、ASAは被爆者が被爆者手帳を取得することや、被爆者の日本からの医療援助申請を手伝ったり、アメリカの医師からの診断書の申請の支援をしてきた。これらの書類はその後在ロサンゼルス日本総領事館、厚生労働省、日本公衆衛生協会、広島県と長崎県、広島市と長崎市、広島医師会、放射線被爆者医療国際協力推進協議会（HICARE）、広島地裁に提出された。1992年からは、ASAは2年に一度の健康診断を準備し、支援している。南カリフォルニアとハワイで行われる健康診断は地元のボランティアからのサポートも得ている。

過去45年間、ロサンゼルス西本願寺、1993年からは高野山別院で原爆犠牲者の追悼式が行われてきた。追悼式には広島市と長崎市の代表者も来る。毎年、コミュニティからゲストスピーカーを選ぶ。ゲストスピーカーは、アメリカおよび海外で被爆者が社会的および医学面での困難なことに直面してきたという認識を高めることへの貢献に応じて選ばれる。2014年、千羽鶴で知られている佐々木貞子氏の兄、佐々木雅弘氏がゲストスピーカーだった。2016年には、光栄にも、私がゲストスピーカーに選ばれた。

ASAは当初から、地元の学校で平和教育活動を促進するためにかなりの時間を費やしてきた。ASAメンバーは個人的な被爆体験について講義を行っている。元会長の据石さんは日本政府から非核特使の委嘱された。ASAのメンバーは、平和のメッセージを広めるために、アメリカ中の小学校、中学校、高校、大学、教会などの組織での講演を続けている。

2018年8月8日に、ASAは、ロサンゼルス市から世界の平和と核兵器のない世界を促進するための努力と献身に対しての認定書を受け取った。

2019年には、KEIRO（敬老）という組織から助成金を受け取った。KEIROは1961年に日系一世

に医療を提供するために設立されたKEIROの使命は、地域の高齢者の生活の質を高めることだ。ASAはKEIROからの助成金を受けて、リトルトーキョーにある高野山別院で介護高齢者のために食事を開いている。

同年の11月、ロサンゼルス全米日系人博物館で「広島—長崎原爆体験」の展覧会が開催される。ASAのメンバーは日系人被爆者の体験を伝えるという役割を担う。

3. 据石和さん

在米被爆者の中には、日本人もアメリカ人もいる。1950年代初めには、多数の在米被爆者が南カリフォルニアに住んでいた。在米被爆者も自分の被爆体験を、あまり話さなかった。ほとんどの場合、被爆者の健康問題は、「実際には存在しない」と問題視されなかった。その当時のアメリカの健康保険制度では、認定されれば、健康保険の補償を失うことを意味した。健康保険を失わないように、在米被爆者の大多数は病歴の詳細を隠した。また、在米被爆者の中には日本語を話さない医師に自分の健康問題を詳しく伝えるのも大変な人もいた。1970年代初頭まで、原爆が投下された時に、アメリカ市民が広島や長崎にいたことについて、アメリカの歴史の中では、言及されていなかった。

1960年代後半には、南カリフォルニアに住んでいる被爆者は、日米両国からの医療支援を求める目的で、前に述べたCABSUSを組織した。CABSUSのメンバーは日系人と、在米日本人だった。据石さんはCABSUSのメンバーだった。「私は月曜日から金曜日までのフルタイムのボランティアになった」と言い、協会の活動を精力的に行った。1977年3月31日、ロサンゼルスで、在米被爆者の健康診断が始まった。1977年から、2017年まで、日本人医師は20回、アメリカを訪れた。これは据石さんの努力の結果だ。時間の経過とともに、据石さんは、原爆の事実を子供や孫に説明するかどうかというのは微妙な問題だと思えてきた。平和教育が、一

番大切だと思うようになった。

据石さんは、米国市民だった。1927年1月26日、ロサンゼルス近くのパサディナのハンティントン病院で生まれた。日本から来た両親はマーケットを営んでいた。その年の秋に両親と日本へ帰り、広島市南観音町に住んだ。帰国後、弟が生まれた。幼年時代は幸せだった。父親からアメリカの話をいつも聞いていた。父親は、「アメリカは素晴らしいところ。お金持ちの国。人々は自分を守るために、一生懸命働き、親切な人ばかり」と言っていた。戦争が起こった1940年代には食料が少なくなり、毎日の生活は大変になった。据石さんは女子挺身隊に入隊して、三菱重工業の工場で、働くことになった。体が弱いので、表に出る仕事はせず、もっぱら、内勤だった。

1945年8月6日、据石さんは熱があったため、仕事を休んだ。その日、朝御飯を食べて、向かいに住んでいる友達とおしゃべりを始めた。よく晴れた青い夏空にアメリカ軍のB29が飛んでいるのが見えた。機体は、銀色に美しく光っていた。据石さんは、いつもB29に手を振って、「おはよう、天使」と、毎日、つぶやいていて、その日も、「おはよう、天使」とつぶやいたが、飛行機の下に白いものが見えた。急に光線が走ったので、地面に伏せて、気を失った。気が付いた時は、下半身が重く感じた。痛みはなかったが、木片が手足に刺さり、血が出ていた。その木片を抜いた。畑に出ていた据石さんの父は、身体中に大火傷を負った。家が壊れ、人々がスローモーションのようにゆっくり動いているのが見えた。走っている人も、泣いている人もいなかった。町は静かだった。負傷している人が見えた。顔中、真っ赤に火ぶくれた人、全身火傷で、生き絶えそうな人もいた。助けを求めている人もいた。土手には、人が溢れ、酷く火傷を負った人は、川に飛び込んでいた。

据石さんの弟は16歳で、広島工業専門学校の学生だった。その日、授業を受けるために学校に行き、爆心地から1キロ離れた校舎の建物の下敷きになり、出血が酷かった。その後、弟は友人に助けられて、帰ってきた。しばらくして、黒い雨が降ってき

た。その夜、向かいに住んでいた友達の弟が帰ってこなかった。据石さんは、友達と一緒に彼女の弟を捜しに行くことにした。友達と相生橋付近にたどり着いた。そこでは、兵隊がたくさんの遺体を並べていた。その時を思い出して、据石さんは、こう言った。「たくさんの死体の中に、一組の母子の死体が、ありました。お母さんの背中と赤ちゃんのおなかだけが、肌色のまま残り、ほかの皮膚の部分は、茶色く焼け焦げていて、ずるっとむけそうな状態でした。お母さんが赤ちゃんをおんぶしていたため、お互いに接していた部分は焼けずにすんだのでしょうか。死体に対する感情は麻痺してしまっていたのですが、その母子の死体を見たときは、つらかったです」と。

被爆後の生活は困難なことだらけだった。家族と一緒にバラックに住んでいた。父の健康は悪くなり、据石さん自身の健康も問題になった。身体中のリンパ腺が腫れて、痛かったのだ。貧血気味でもあった。1年間ぐらい、床に伏せたままだった。1946年の夏、体調が回復した据石さんは、外に出て、毎日の活動を少しずつ始めた。

据石さんは、洋裁に興味があった。1949年、洋裁を学ぶために親戚がいるハワイに行った。そして、洋裁学校を卒業した後に、出生地のパサディナへ移り住んだ。パサディナシティカレッジで、家政科の授業を取った。しばらくして、将来の結婚相手にめぐり会った。その人は日系二世のマス据石氏だった。マスさんはカリフォルニアのサンホセ生まれで、彼の両親は熊本出身だった。据石さんは、30歳になったとき、マスさんと結婚した。

結婚後の据石さんの健康状態は、少し、悪化した。いつも低血圧で、貧血、立ちくらみがあった。それでも、31歳で妊娠した。妊娠中は不安があった。原爆体験から、据石さんは赤ちゃんの健康を心配していたが、健康な女の子を出産した。女の子をクリスティーンと名付けた。出産後1年間、据石さんの健康状態は不安定だった。ノイローゼ状態と診断された。身体が弱くて、家事をするのは、大変だった。据石さんはノイローゼの診断について、誤診だったのではないかと、初めて思った。

1960年代初め、ロサンゼルスに被爆者が集まり、

在米被爆者の活動がスタートした。据石さんは、米
国被爆者協会すなわち CABSUS の会員として活動
をはじめた。協会の活動は、被爆者を援護する被爆
者医療の支援と、被爆者健康手帳の取得だった。そ
してこの二点を日本の厚生大臣（当時）に陳情に
行った。その結果、1977 年、在米被爆者の健康診
断が始まった。

1993 年から、ASA メンバーになった。その後、
ASA の二代目の会長になった。日本政府から特別
大使のタイトルを与えられた。平和への思いを若者
に話すのが、据石さんの一番大切な活動になった。
平和教育の活動も、たくさんした。小学生から大学
生に話してきた。色々な南カリフォルニアの小学校
に行き、話をし、子供と一緒に平和の絵を描き、
平和の手紙を書いて、平和のメッセージを共有した。
また、自身の被爆者体験をアメリカ中の大学生に伝
えた。USC、UCLA、UCアーバイン、創価大学、
ブラウン大学などから招待され、据石さんの講義は
深い感銘を人々に与えた。日本と、アメリカの新聞
やテレビなどのメディアにもインタビューされた。
2011 年には、世界平和の運動と被爆者のための活
動について、天皇陛下から、旭日章を授与された。
据石さんは、2017 年 6 月 12 日に亡くなった。

粘り強く、意志堅固な女性だった。ある人が、
「不可能です」と言ったら、据石さんは、いつも、
「可能です」と答えた。車の運転もできなくて、英
語が上手ではなかったが、アメリカで、たくさん
の平和活動をした。

据石さん自身は目立つ存在になろうという気持
ちはなかったが、据石さんのおかげで、たくさん
の日系アメリカ人女性が CABSUS に参加した。据石
さんが心配したのは、CABSUS や ASA が政治的
になったり、政治的意図がある人々にコントロール
されないようにするという事だった。据石さんの
リーダーシップは、公聴会に出席したり、公の場
でスピーチしたり、また自身の非核の世界を実現さ
せたいという気持ちから、発揮されていったのだ。

4. 更科洵爾さん

据石さんが亡くなった時、更科洵爾氏が ASA の
会長になった。ASA が設立された時、更科さんは
秘書だった。秘書として、彼は広島市、広島県庁、
広島県医師会の代表者とのやり取りを担当していた。
ASA の会長になる前から、更科さんは非常に活
発な協会のメンバーだった。長い間、南カリフォル
ニアでの多くの公開イベントに出席し、原爆投下時
の広島での体験を目撃証言している。

1929 年 1 月 29 日に、更科さんはハワイのマウ
イ島で生まれた。父の出身は広島県の高田郡（現
在の安芸高田市）だった。父は京都の西本願寺の浄
土真宗本派の僧侶だった。1916 年、ハワイへの赴
任を命じられ、父は母とハワイのオアフ島に移り住
んだ。一番上の姉（真理子さん）と一番上の兄（莞
爾さん）とその下の兄（卓爾さん）はオアフ島で
生まれた。1924 年、家族はマウイ島のラハイナに
移り、父は新しいラハイナ本願寺の建物を作った。
下の姉（哲子さん）はマウイ島で生まれた。更科
さんは、1936 年、両親と兄姉とホノルルに移った。

1937 年、母と兄姉と一緒に広島に帰ってきた。
その時、更科さんは 7 歳だった。父は時々、ハ
ワイから広島に帰って来た。戦争が始まった時、
母と 2 人の姉は、高田郡の寺に引っ越した。更科
さんは翠町にある県立広島第一中学校の寄宿舎に
入っていた。観音町にある旭兵器製作所の工場に
も勤めていた。学徒動員として高射砲の弾を作
っていた。

1941 年に戦争が始まった時、ホノルルの本願
寺に、アメリカの FBI が来て日本人の僧侶である
ことでスパイの容疑をかけられ、父は逮捕された。
ハワイからアメリカ本土へ渡り、色々な収容所を
転々と回された。父は戦争が終わるまで強制収容
所に入っていた。

更科さんの話によると、広島にいた莞爾さんは
召集され、大日本帝国海軍の将校となった。卓爾
さんも大日本帝国陸軍に召集され、満州に出兵
した。終戦直前に、卓爾さんはロシアの捕虜に
なり、シベリアに送られた。1947 年には日本に
戻った。

次のビデオは、国立広島原爆死没者追悼平和祈念

館のために2017年に撮影されたもので、8月6日の体験を語る更科さん御自身だ。

8月6日 https://www.global-peace.go.jp/picture/pic_syousai.php?gbID=1192&dt=190905170244 10:09-14:16

忘れることのできない日です。寄宿舎生4、5人と広島を歩いて南観音町の旭兵器の工場に朝の8時に着きました。向こう岸に江波山が見えるところにあるその工場の中に入り、その後、工場の建物を出た時に、ものすごいオレンジ色の光を感じました。それと同時に爆風により、完全に地面にたたきつけられました。

建物は壊れ、ごみは飛び立ち、ガラスは飛んできました。不思議なことに私は爆音を聞きませんでした。爆音は聞いていないのに、たたきのめされたことは覚えており、その材木の中から立ち上がって「ああこれは直撃弾だな」と思いました。まず、第一に行かなければならないと思ったのが、医務室でした。

医務室は窓ガラスの多い建物でその中に白い服を着た看護師さんが、ガラスだらけで真っ赤に染まり、「あわーわーわー」と口を指しているの、見ると3センチ、4センチぐらいのガラスが、彼女の舌に引っかかって、恐る恐るそれを引っ張り出したのを覚えています。別に私ができることはないので、包帯を渡したり、ガーゼを渡したり、それだけしかすることができませんでした。

自分の働いている工場の建物に入った時、先生が「おっ解散。みんな帰ってもいい」と言われたので、私たち4人、5人の寄宿舎生が広島を向かって橋を渡って行こうとしました。死人が橋をいっぱい埋めて、歩くこともできないぐらい死人がたくさんおりました。川の中には5、600人の生きている人と死んでる人が流れていたり、砂場に横たわっている人がたくさんいました。

広島を向かうのは、火の海で、とうてい街の中に

は入れる状態ではありませんでしたので、また工場に戻って、そこで一晩を過ごしました。おむすびをいただいてありがたかったです。お腹がすいていましたから。

次の日、8月7日に更科さんは、広島市に入った。死のイメージはどこでも見られた。死んだ母親が死んだ幼児の子供を抱き締めるイメージは今でも更科さんの脳裏に深く残っている。寄宿舎に帰った時、寄宿舎の先生に遺体の火葬を手伝うように言われた。更科さんは木材を集め、大人は遺体を焼いた。約4日後、彼は高田郡に戻り、母親と2人の姉と再会した。すごく疲れていたため、更科さんは3日間連続で眠った。終戦後の11月、父は収容所を出て、サンフランシスコから船で横浜に帰ってきた。

更科さんはアメリカと日本の二重国籍だったので、いずれアメリカに帰るつもりだった。1949年、ハワイのマウイ島に帰り、学校に3学期ぐらいいた。7ヶ月後、ホノルルに移り、日本語のKAHUラジオにアナウンサーとして勤めた。朝鮮戦争が始まるとアメリカ軍に徴兵され、更科さんはカリフォルニアのモンレー外国語学院に派遣され、日本語の言語スペシャリストとして訓練させられた。日本語の分からない人に日本語を教えて、英語と日本語の翻訳と発音も教えていた。朝鮮戦争の戦闘が終わった後から、南カリフォルニアのノースロップコーポレーションという会社で30年間働いた。その後、広島を向かうときよこさんと結婚した。現在、息子が1人、2人の孫がいる。

更科さんはCABSUSの会員だった。1992年には、ASAの会員になった。退職後、ASAの活動にもっと参加するようになった。2003年から、被爆者手帳の取得手続きを手伝っていた。2017年、ASAの会長になった。2019年、90歳になったが、いつも忙しくしている。同年7月に、アリゾナのフェニックスに行き、300人の前で被爆体験を話した。

さらに、同年11月9日にはロサンゼルスで全米日系人博物館で講演をした。更科さんは平和運動として、学校、大学、コミュニティセンターなどへ行

き、被爆体験を証言し、核兵器のない世界のために講演を続けている。

ビデオの続きで更科さんのメッセージを伝える。

35 : 33 https://www.global-peace.go.jp/picture/pic_syousai.php?gbID=1192&dt=190905170244

原爆がいかに無残で、赤ちゃんまで殺してしまう、実に無残なる兵器であるということ、被爆者体験者として伝えることができるわけです。将来のある若い人たちに、特に問い掛けたいのです。「水爆、原爆を落とされた場合に、あなたたちはどうしますか」「もし自分の子供が帰ってこなかった場合にどうしますか」親として、どんなことがあっても子供を捜したい。そして、自分を犠牲にしてまで、親を捜したい、兄弟を捜したいと、人間は自分の愛する人達を捜すに違いありません。互いに自分のこととして、将来起こるかも分からない自分たちの孫たちのこととして、私は話しているのです。「核兵器がいかに無残な兵器であるか」ということを、今、皆様にお伝えし、将来、このような兵器は使わないように、世界の平和のために大切なことですから、「今からやらなければ、あなたたちの孫、ひ孫はどうなるのですか」ということを私はお伝えしたいのです。

実に今は、難しい立場にあり、日本に住んでいる日本人たち、アメリカに住んでるアメリカ国民も、原爆、水爆というものを身近に感じるようになりました。国の防御のために、こういう兵器は必要なのかも知れません。その結果、いかに悪影響を及ぼすかということ、を言えるのは、被爆を経験した者が言えることだと思います。アメリカにしろ、日本にしろ、難しい立場にあることは、よくよく私も理解しています。けれども願わくば、核兵器なき世界を被爆者として望んでいます。

私のこのプレゼンテーションに必要な情報がすべ

て揃っていることを確認するために、更科さんは自宅に私を招待し、私たちは8時間近く一緒に過ごした。更科さんは、今日ここにいることを願っていると思う。彼の励みになるような支援は私にとって非常に重要だ。

2019年のASAの理事会の理事は清野みどり氏(秘書)、岡部妙子氏(会計監査)、中野博子氏(会計)、三保ダレル氏(写真家)、蠣田ハワード氏、清野敏幸氏だ。

5. あとがき

人類の歴史上、在米被爆者の歴史の部分は大切なことだ。人間の尊厳について深く考えさせてくれるからだ。在米被爆者体験、在米被爆者平和運動から学べることは、戦争は決して正解ではなく、核兵器の使用は決して解決策ではないということだ。私は、これからも在米被爆者体験を語り継ぎ、それが平和推進運動の一助となれば嬉しいことだ。

【付記】

本稿は、2019年10月25日、立命館大学国際平和ミュージアム平和教育研究センターにおける同名タイトルの講演を再構成し、加筆したものである。

References

- Alperovitz, Gar. *The Decision to Use the Atomic Bomb*. New York: First Vintage Books Edition, 1996.
- Azuma, Eiichiro. "The Politics of Transnational History Making: Japanese Immigrants on the Western "Frontier," 1927-1941." *The Journal of American History* 84.4 (March 2003) : 1401-1430.
- Coffman, Tom. *Tadaina! I am Home. A Transnational Family History*. Honolulu: University of Hawaii Press, 2018.
- Japanese American Citizens League. *The Japanese American Experience. Curriculum and Resource Guide*. 5th Edition. National Education Association, 2011. <https://jacl.org/education/resources/>
- 国立広島長崎死没者追悼平和祈念館、更科洵爾、ビデオ 39:51 https://www.global-peace.go.jp/picture/pic_syousai.php?gbID=1192&dt=191129214326
- 国立広島長崎死没者追悼平和祈念館、据石和、ビデオ 21:42 https://www.global-peace.go.jp/picture/pic_syousai.php?gbID=1296&dt=191129214846

池埜聡、中尾賀要子「在米被爆者協会分裂の要因分析と今後の援護課題」『人間福祉学研究』6-1、2013年、47～48頁 <http://hdl.handle.net/10236/11558>

伊藤千賀子著、米国広島・長崎原爆被爆者協会編『はざまに生きて五十年在米被爆者のあゆみ』、米国広島・長崎原爆被爆者協会、1996年

Keiro. Advancing the Quality of Senior Life. “Supporting the Strong Ties of Hibakusha: American Society of Hiroshima-Nagasaki A-Bomb Survivors.” November 14, 2019 <https://www.keiro.org/grants-news/american-society-of-a-bomb-survivors>

Komatsu, Teruyuki. “Reconsidering the Issue of Cultural, Ethnic, and Religious Identities: Learning from the History of Global Migration, Japanese History of Immigration, and a History of Cultural and Ethnic Identity.” 『名古屋学院論集社会科学編』52-4、2016年、1～21頁

倉本莞司『在米五十年 私とアメリカの被爆者』、日本図書刊行会、1999年

Maruyama, Paul K. *Escape from Manchuria. The Rescue of 1.7 Million Japanese Civilians Trapped in Soviet-occupied Manchuria Following the End of World War II.* Toplink Publishing, 2017.

Ôe, Kenzaburo. *Hiroshima Notes.* Translated by David L. Swain and Toshi Yonezawa. New York: Grove Press, 1981.

Okada, John. *No - No Boy.* Seattle and London: University of Washington Press, 1976.

大西良子「私たちが人類最後の被爆者であってほしい 据石加 1」『日系文化をはぐくむ月刊誌』368、2005年、36～38頁

「私たちが人類最後の被爆者であってほしい 据石加 2」

『日系文化をはぐくむ月刊誌』369、2006年、36～38頁

「私たちが人類最後の被爆者であってほしい 据石加 3」

『日系文化をはぐくむ月刊誌』370、2006年、36～38頁

「私たちが人類最後の被爆者であってほしい 据石加 4」

『日系文化をはぐくむ月刊誌』371、2006年、34～36頁

Okada, Taiji; Miyanishi, Michihiro, and Hiroaki Yamada. “Result of Health Survey in Atomic Bomb Survivors Residing in California.” *Hiroshima Igaku* 30.9 (1977) : 3-35.

Physicians for Social Responsibility. “Baltimore and Los Angeles City Councils Vote to Support Nuclear Disarmament.” August 13, 2018 <https://www.psr.org/blog/2018/08/13/baltimore-and-los-angeles-city-councils-vote-to-support-nuclear-disarmament/>

Sōdei, Rinjiro. *Were We the Enemy? American Survivors of Hiroshima.* Edited by John Junkerman. Forward by John W. Dower. Boulder: Westview Press, 1998.

Takai, Yukari. “Navigating Transpacific Passages: Steamships Companies, State Regulators, and Transshipment of Japanese in the Early-Twentieth-Century Pacific Northwest.” *Journal of American Ethnic Studies* 30.3 (2011): 7-34.

Wake, Naoko. “Surviving the Bomb in America.” *Pacific Historical Review* 86.3 (2017) : 472-509.